

新刊紹介



とんじ・けんじ (片倉邦雄・津田謙二) 著

『トン考—ヒトとブタをめぐる愛憎の文化史—』

アートダイジェスト 2001年 318 ページ

齋藤 俊輔

本書は、「とんじ」こと当大学の国際関係学部で教鞭をとられる片倉邦雄教授と、「けんじ」こと津田謙二氏による共著である。片倉邦雄先生は元は外務省に勤務されており、とくにエジプトやイラクなどの大使をなさったご経験から、中東問題に精通なさっておられる。わたしは直接ご指導していただいたことはないが、昨今の「タリバン」の諸事件に関して国際関係学部で公開講義があった際に、湾岸戦争と今回の軍事問題を比較して発表を行っていらっしやっただのを興味深く拝聴させていただいた。津田謙二氏は、住友化学工業株式会社を経て、現在 INFOBOX 代表としてご活躍なさっている。

そうしたお二人によって書かれた本書は、「ブタ」の百科辞典、いやむしろ「ブタ」そのものかもしれない。本文にはこのような文章がある。

欧米でもそうであるが、とくに中国ではブタの身体の各部位ことごとくが食の対象となっていて、心臓、肝臓、胃や腸は言うに及ばず、耳、尻尾、舌、脳、骨髄までもがそれぞれの味を生かして調理されている。脂肪のしみ込んだ皮の美味なことは、筆者は今でも思い出すし、睾丸

や子宮も口にすることがある。血液を凝固させたものはレバーの味がしたし、ブタ皮の煮ごりもまたおいしい〔同書56ページ〕。

「ブタの肉すべて使うべし、捨てることあたわず」というタスキがブタの背にはかかっているのである。つまり、「捨てるどころのない」ブタと同様に、「本書も読み捨てる場所がない」、いや「読み捨ててはならない」、といったら言い過ぎだろうか。

それはそうと本書は、ただ単に「ブタ」についてのみ書かれた著作ではない。副題に「ヒトとブタをめぐる文化史」とあるように、ヒトとブタの関係への言及が本書の特徴であり、テーマでもある。そういった意味で本書はブタを見ながらヒトを見ている、といった感がある。

さて先にも述べた通り、本書は捨てるどころのない著作である。さらに個人的見解を述べると、本書はやはりその隅から隅まで、まるでブタを食べるように、最初から最後まで読み解くのが、著者の意図を把握するためのもっともよい方法かと思われる。

第1章はブタと人間の関係の出発点から語り始められる。つまり、ブタの家畜化の概要である。家畜化とは、ブタが人間によ

って人間の都合の良いように作りかえられていく過程である。しかし、家畜化は人間からの一方的な働きかけではない。それは、家畜化はヒトにとっては食料確保、ブタにとっては安全な生存を確保できるという双方にメリットのある行為であったからである。いいかえるならば、ヒトとブタの関係はその出発点から、すでに双方向的な性格を持ったものであったのである。こうしたことを踏まえつつ、イノシシからブタへ、そしてさらなる品種改良へとブタの家畜化の過程が語られる。家畜化の過程では、体毛の減少、頭骨の短縮、体形の特異化、発育の促進、繁殖能力、自己防衛能力などの変化が明らかにされていく。さらに、話題は世界各地でのブタと人間との関係に広がってゆくこととなる。まず中国からはじまって、日本、インド・チベット、東南アジア、欧州と世界を横断するように進み、そしてアメリカ大陸で締め括られる。

第2章では、イスラム圏におけるブタの禁忌について歴史的に鳥瞰し、さらに禁忌の発生した理由について考察している。ブタの禁忌についての源泉はエジプトの地に求められるものであった。もっとも、エジプトではブタがはじめから忌み嫌われていたわけではなく、むしろ共生に近い関係であったという。それがエジプトの政治的統一の過程で禁忌が発生したのである。こうしたブタの禁忌の要因は、物理的な要因と精神的な要因の二つに区分できる。前者は、高温地域では肉が傷みやすいこと、またブタがせん毛虫という寄生虫の宿主であったことを経験知として心得ていたこと、気候変動・砂漠化の中で定住生活から遊牧生活に移った際に、ブタがそれに適合しなかつ

たこと、などである。後者はとくに本書の中で重要かつ興味深い言及であって、人間がブタに対して憧憬を抱く中で、ブタと人間との間の一線を超えることへの危機感が生じ、それをタブー視するため、禁忌が強まったということである。愛してはならないブタを愛するがゆえに、それを縛る禁忌が発生してしまったのである。それが、人間がブタに対して愛憎半ばするアンビバレントな感情を抱いてしまった根拠であるようだ。

第3章に至っては、「アラカルト」と題されているとおりに、ブタに関する様々な事柄が、名前から小説、そして音楽にまで及んで語られている。この章に関して言えば、あまりに広範囲に及ぶ知識のため、一括して論じるようなことはできない。しかし実を言えば、一番おもしろい章であるともいえる。さらに言えば、この本の著者たちにとっても、この章で語るブタに関するあらゆることが、本領発揮の場だったのではないかと想像してしまうのだが、違うのだろうか？。というわけで、この部分に関してはわたしが語るよりむしろ、読者自身が興味にしたがって読むのがよいと思われるので、多弁は避けよう。

第4章は、ブタのイメージを一新させるねらいがある。ブタは当然のことながら、どうも食料としてばかりの面が目立っていた。しかしながら、この章ではそれとは違ったブタの一面を紹介しており、古くは船と船の衝突を避ける霧笛の役割、そしてよく知られているようにトリュフの探索や、現代に至っては医学の面で実験動物として有効であることまでに話は及ぶ。そして最後には、リサイクルという未来計画へのブ

タの貢献を推奨して章を結んでいる。

最終章の第5章では、ブタとヒトの今日の関係、つまりブタ愛好家に迫ったもので、本書でブタに愛着をもった人は、ぜひブタとブタの愛好家に直接接触を試みたらよろしいのではないだろうか。つまり、ここまで読み進んだ方は、もうブタ愛好家の仲間入りなのです。

本書には以上のような流れがある。はじめに述べたとおり、ブタのように「読み捨てのできない」本書であるため、くわえてひとつ私が薦めたいのは、さしずめブタの皮を食べるように、裏表紙の英語とフランス語、そしてドイツ語の辞書のブタに関する語句を眺めてみることである。それを見ると、ブタへの限りない罵詈雑言、例えば英語では **pig** と **hog** の項があり、「ブタ」という本来の意味から **pig** であれば「大食漢、不潔な人、あるいは身持ちの悪い女」などに派生していく。フランス語の **cochon (ne)** でも、「好色の、卑猥な、きたない、ずるい」などの意味を持ち、ドイツ語の **Schwein** も同じような、「不潔な人、ふしだらな人、下品な人」などの表現に使われる。どうやらヨーロッパにおけるブタのイメージというものは、甚だよからぬもので、特に性的な部分の悪い意味での隠喩とされることが多いようだ。

では、現代の日本ではブタのイメージはどのようなものなのだろうか。それについては本文の中に、肥満や高コレステロール、といった健康と結びついた面で嫌がられるといった指摘がある。『広辞苑』をみたところ、英語の辞書にあるような「ブタ」の語句に隠喩としてこめられる意味について言及が、俗語としても掲載されている例はない。しかしながら、現代日本でのブタに対してのイメージの総体は、英語やフランス語に見られるようなものではないとしても、総体的には宜しからぬものではないだろうか。

確かに本稿のなかでも、そういったブタのイメージについて述べられてはいる。ただ理解しやすいように、それが一般的にどのようなものであるかを一項目なり、一章なり、を設けて詳しく述べておく必要はあるかと思う。特に一般読者向けである本書は、ブタが忌み嫌われている、つまりタブーが存在している、という事実を真っ先に知らせるべきだと思われる。そしてそののちに、愛憎を語ってゆくことが望ましいのではないだろうか。また、一般図書としては情報量が多いかと思われるので、読みにくい面があるかもしれない。どんなにうまいものでも、食べ過ぎては「胃にもたれて」しまうから…。